

創立125周年記念式典

記念式典

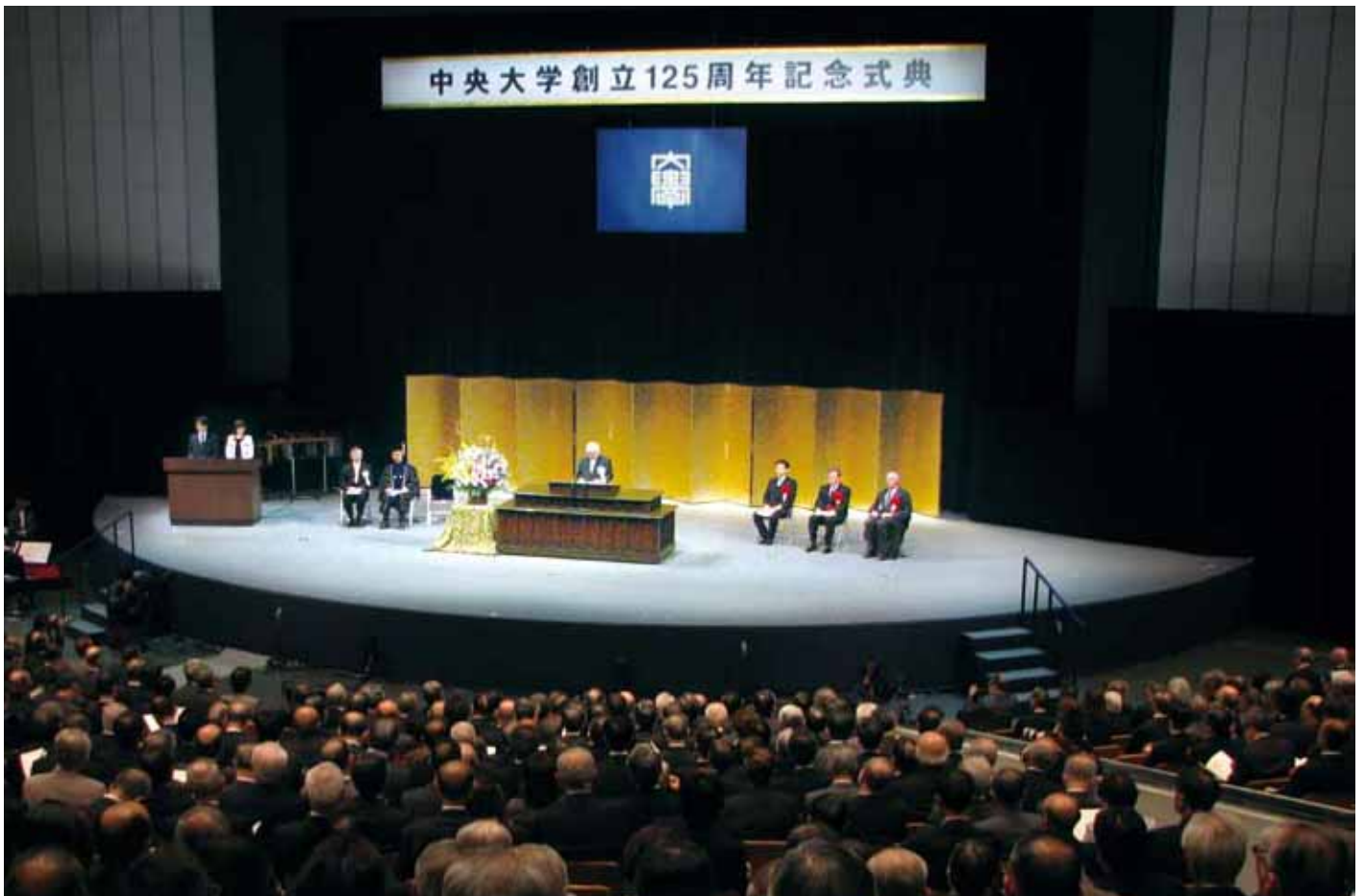
本年、創立125周年を迎えた本学は、11月13日（土）午後2時、すっきりと晴れわたった空のもと、多摩キャンパス9号館クレセントホールに、大学役員・経験者、政府・国会関係者、海外協定校を含む他大学代表者、創立者ご子孫、周年事業に多大なるご支援・ご尽力をいただいた学員・大学関係者、篤志家の方々等、約1,600人の列席を得て、創立125周年記念式典を挙行了しました。四部構成の記念式典は、中央大学学友会文化連盟音楽研究会による戴冠式行進曲「王冠」の演奏により開幕となり、式典第一幕では、式辞(別紙に全文掲載)において、理事長並びに総長・学長が、本学が描く未来像について力強く述べたことに対して、ご来賓、高木義明文部科学大臣代理鈴木寛文部科学副大臣、白井克彦日本私立大学連盟会長、エイドリアン・ウィットフィールド英国ミドルテンプル代表の三氏からは、祝意とともに、今後の本学に対する大いなる期待と激励の祝辞をいただき

ました。

第二幕では、本学を生き育ててきた先人たちの心に出会う、懐かしく新しい感動の時間旅行をバーチャルリアリティ(VR)&寸劇で体感する「中央大学 源流、記憶 そして未来へ」が、上映・上演され、本学の創設時から、駿河台時代を経て多摩キャンパスまで、そして未来を概観する27分間に、式場は、追憶と深い感動に包まれました。

第一幕、第二幕の本学がめざす未来像を受けて、第三幕では、6学部、7大学院研究科、3専門職大学院、4附属高等学校、2附属中学校の在学生・生徒34人により、未来への力強い心意気が「誓いの言葉」として発せられ、最終章第四幕は、全員で校歌を斉唱して、いつまでも続く大きな拍手に包まれて、記念式典は閉幕しました。

なお、記念式典の様子は、8号館大教室棟、後楽園キャンパス5号館及び4附属学校の各講堂等で同時放映するとともに、インターネットによる全国配信を行いました。



式辞・来賓祝辞

創立125周年記念式典第一幕における久野修慈理事長式辞、永井和之総長・学長式辞については、別刷りの「中央大学創立125周年記念式典 式次第・式辞」に全文を掲載いたしました。式典当日は、理事長、総長・学長が力強く述べた本学が描く未来像について、ご来賓お三方から、それぞれに、祝意とともに、今後の本学に対する大いなる期待と激励のお言葉をいただきました。

鈴木寛文部科学副大臣・祝辞要旨

中央大学は、建学の精神である「實地應用ノ素ヲ養フ」に基づき実学的教育を行い、これまで我が国の法曹界・経済界・産業界など様々な分野において、多くの優れた実務家を輩出し、我が国の発展に大きく寄与してこられました。また、この間、大学のみならず、高等学校及び中学校を擁する総合的な学校法人として発展を続けておられます。久野修慈理事長をはじめ、歴代の役員、教職員の皆さまのこれまでのたゆみない御努力に深く敬意を表します。教育は、

久野修慈理事長(左上)
永井和之総長・学長(右上)
鈴木寛文部科学副大臣(左下)
白井克彦日本私立大学連盟会長(右下)



これからの日本を拓いていく礎です。我が国が発展し、世界に貢献していくためには、それぞれの学校が個性や特色を十分に発揮しながら教育の質を高めていくことが、より一層大切になってきています。

本日の栄えある記念式典を契機に、学校法人中央大学が、これまで築き上げてこられた伝統と実績の上に、役員、教職員ならびに関係の皆さまの御研鑽と御尽力により、今後更なる発展を遂げられますことを祈念し、お祝いの言葉といたします。

白井克彦日本私立大学連盟会長・祝辞要旨

中央大学には連盟設立当時(1951年)より発起人校としてご参画いただき、連盟への深いご理解と熱意のもとに、常に先導的立場で私学振興のためにご尽力をいただいております。現在、いずれの私学においても、急激な環境変化に対応するため検討を重ね、この現状にいま何をなすべきか、改めて自らに深く問い直しつつ、試行錯誤を重ねています。そのなかで、貴大学は、今後においては、「国際化」を諸施策の基本に据えて、中央大学附属中学校の開設、学校法人横浜山手女子学園との系属・合併を踏まえて、附属学校から大学院までの総合学園としての教育体制をより盤石なものに整えるべく、発展的な取り組みに邁進されるとのこと。常に進化し続ける取り組みにより成し遂げられた今日の隆盛は、ここにおられる中央大学の関係者お一人おひとりが、私学にとって最も重要な変わらざるべき建学の精神と伝統を受け継ぎ、変わるべき改革の意志と勇気を持ち続けたたゆまぬ努力の成果であったと確信しております。

中央大学が、その輝かしい歴史と伝統とともに、今後、より一層隆昌され、わが国そして世界の高等教育の発展に寄与されますことを心からお祈り申し上げ、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

中央大学創立125周年記念式典に寄せて

ミドルテンブル勅任弁護士

エイドリアン・ウィットフィールド・ミドルテンブル代表・祝辞要旨

The Honourable Society of the Middle Temple, London

Adrian Whitfield QC

この度の慶事に当たり、久野理事長、永井総長・学長を始めとする中央大学の教職員の皆様、そして中央大学の友人の方々に親しくお目にかかり、同僚のピーター・ヒリング英国空軍准将(Air Commodore)と共に、ミドルテンブルを代表して祝辞を申し述べる機会を得ましたことは、私にとりましては晴れやかなる喜びの限りであり、この上ない光栄であります。私ウィットフィールドは、ミドルテンブルの元理事長(Treasurer)で、現在は弁論技術向上委員会の委員長(Director of Advocacy Training)を務めております。また、ヒリング准将は、ミドルテンブルの実務全体の最高責任者である事務総長(Under Treasurer)の地位にございます。同時に、私は現役の法廷弁護士として、コモンローの法実務に携わっておりますが、皆様もご存知のように、この偉大な中央大学の創立者の中には、コモンローの伝統から啓示を受けた人々がおられます。

中央大学創立の偉業に参画された4人の卓越した法律家、すなわち穂積陳重博士、岡村輝彦博士、土方寧博士、そして英吉利法律学校の初代校長に就かれた増島六一郎博士がこぞってミドルテンブルで学ばれたことに、私は大きな誇りを感じています。ミドルテンブルの図書館には、今もなお増島先生の肖像画が掲げられていますが、これは、先生旧蔵の英米法関連図書(正求堂文庫)を管理運営する正求堂財団の理事を先生のお孫様が務められていたご縁によって、同財団から寄贈されたものです。

増島博士は、私の“ヒーロー”の一人で

もあります。先生は1881年に23歳でミドルテンブルに入学し、1883年に法廷弁護士の資格を取得されました。そんな往時に、一人の若者が単身地球を半周し、外国の法律制度を学ぼうとするのは、多くの困難や孤独感と戦わなければならない、まさに全人格を賭した試煉であったに違いありません。

先生は明らかに、コモンローすなわち英国の司法が長い歳月をかけて作り上げた判例法の体系に心を奪われたのです。何故でしょうか？先生の良き友人であり、かつてニューヨーク州弁護士会会長を務めたマーティン・テイラー氏の講演録がミドルテンブルに残っています。同氏の記すところによれば、増島先生との初めての出会いは、アメリカから乗った船がロンドン入港を控えて待機中のことでした。先生は“堂々たる絹のガウンに身を包み”、デッキを歩きつ戻りつしながら、「正求堂文庫」の設立に際して詠んだ詩を朗唱していたといひます。その詩は、弓術師範の家柄に生を享けたサムライに相応しく、コモンローを「的に向かって直進する矢羽の飛翔」に喩えるものであります。この偶然の出会いを機に芽生えた暖かい友情は、その後いっそう深まり、永く続きました。

ここでもう一度、増島先生の肖像画に話を戻しましょう。私がこの画に惹かれるのは何故でしょうか？それは、知性に裏付けられた勇気と自立心の大切さを私たちに教えてくれます。それはまた、新しい発想や学問に対して心を開くことの大切さや、国境を越えた友情の大切さについても教えてくれます。然るがゆえ



に、それは、偉大な大学とはどのような大学であるかについても教えてくれているのです。永井学長、貴方が率いておられる中央大学は、まさにそのような大学の一つです。先にお送りいただいた中央大学のパンフレットに“行動する知性 knowledge into action”とありましたが、これは実に素晴らしいスローガンです。このパンフレットからは、中央大学が“白門”と呼ばれる謂われについても学ぶことができました。知の入り口にして、すべての知の守護者たる“白き門”。大学のあるべき姿を形容するのに、これほど相応しい言葉を私は知りません。

喜ばしいことに、日本の法曹界とミドルテンブルとの交流は、今日なお活発に続いています。ここ数年の間にも、日本の裁判官や弁護士をお迎えする機会に恵まれました。来訪された皆さんは、日本で裁判員裁判制度が導入されたこともあって、英国の刑事陪審の準備や進め方について、熱心に学んでいかれました。私も幾度かセミナーに参加させていただきましたが、そのすべてを心ゆくまで楽しむことができたのは、日本の方々の熱意や礼儀正しさもさることながら、法曹人同士の揺るぎない絆のお陰であったと確信しています。

永井学長、ミドルテンブルがこの記念すべき日を挙げて慶賀申し上げるのは、こうしたことがらも下地となっていることを、どうかお心に留めてください。私たちにくださった最高にして寛大な歓迎に厚く御礼申し上げますと共に、中央大学の今後益々のご発展を心からお祈りいたします。

VR&寸劇

『中央大学 源流、記憶 そして未来へ』

式典第二幕は、総合政策学部の黒田絵美子教授が台本の執筆、演出を担当した「バーチャルリアリティ(VR)&寸劇」で感動の頂点に達しました。凸版印刷株式会社の最先端のコンピュータ・グラフィックス(CG)技術を背景に、中央大学の源流、記憶、そして未来を、3名の役者が熱演。寸劇は、モノレールから校舎へ向かう白門プロムナード、少し上空に視線を変え、多摩キャンパスを外観するところから始まりました。

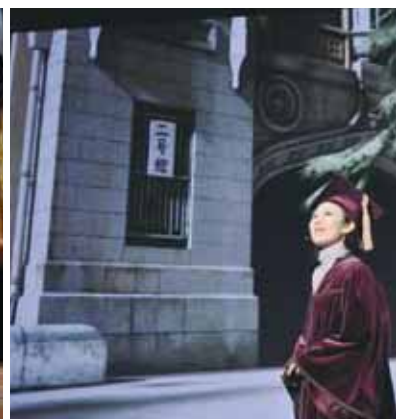
歴史を遡ること125年前。中央大学の源流ともいわれる英国4大法曹院の1つ、ミドルテンブルに留学していた、後の英吉利法律学校初代校長増島六一郎役を落語家の柳家さん喬師匠が演じ、現地取材に基づき正確に作り込まれたミドルテンブルホールのVRを背景に、増島がどんな勉強をし、またどれほど成績が良かったのかを披露しました。

明治18年、帰国した増島は、神田錦町に18人の仲間の法律家とともに中央大学の前身である英吉利法律学校を設立。やがて校名は東京法学院、中央大学と改められ、

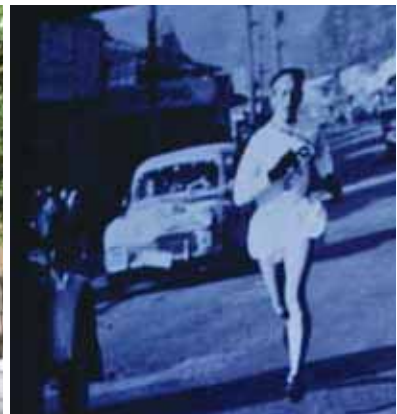
総合大学へと成長していきます。

その後スクリーンには、今はなき神田駿河台校舎が完全な姿で再現され、観客の多くを占める卒業生を懐かしい思い出の時間にタイムスリップさせました。夜、閉門時間が過ぎても勉強をしている学生の熱気に圧倒された警備員が、声をかけるのをやめて優しく見守るシーンや、戦地に赴く学友を『惜別の歌』で送り出すシーン。さらには、駿河台校舎閉校祭の時、窓の明かりで「中大」の2文字が書かれた校舎を背景に、「中央大学を支えてくれた街の人たち、有難うございました」、「古本屋さん、喫茶店、雀荘、お世話になりました」と発せられたシーンには、メガネを上げてハンカチを取る卒業生の姿が目立ちました。

それから32年の月日が経ち、緑豊かで広大な多摩キャンパスを巣立った卒業生も50歳を超えました。本学の建学の精神は今も引き継がれ、寸劇の最後は、美しいキャンパスのCGを背景に、本学のユニバーシティメッセージである「行動する知性。」で締めくくられました。



バーチャルリアリティ(Virtual Reality)とは人工的に現実感を作り出す技術。高精細なCG(コンピュータグラフィックス)によって再現された仮想空間のなかにリアルタイムに視点移動できるのもそのひとつ。記念式典で上演されるドラマの背後のスクリーンに投影される映像は、コンピュータによってライブで生成されたシーンで、実際の役者の演技にあわせて動かしている。今回の映像制作におけるVR技術については、凸版印刷株式会社と中央大学理工学部・牧野光則教授の研究室との共同研究がおこなわれた。



V R 監督



黒田敏康

凸版印刷株式会社文化事業推進本部所属。故宮博物院（北京）との文化財デジタル化応用共同研究のほか「海のエジプト展」や「国宝阿修羅展」等最新 VR の演出、監督を手掛ける。武蔵野美術大学非常勤講師。

出演



柳家さん喬

落語家。落語協会常任理事。中央大学附属高等学校卒。1987 年文化庁芸術祭賞受賞。



宮ヶ原千絵

ミュージカル女優。ミュージカル劇団 Steps 所属。中央大学総合政策学部第 4 期生。



吉岡拓麻

中央大学商学部経営学科 3 年在学中。黒田ゼミ聴講生。芝居は初挑戦で 17 回の猛稽古をこなした。

演奏



maruse

作曲、バイオリン演奏。中山美穂、大槻ケンヂなどをサポート。花王などの CM 音楽を手掛ける。



葛岡みち

ピアノ演奏。川本真琴、福山雅治などをサポート。CM 音楽を薬用養命酒、日本ハム、AEON などに提供。

台本・演出

黒田絵美子

総合政策学部教授
劇作家



中央大学出身者でないわたしは、昨年来、まったく白紙の状態から大学の歴史を学びました。18人の創立者たちや、役員としては初の幹事となる佐藤正之先生の大学に対する熱く、温かい思いに感じ入り、「他人を思い、明日を思う」というテーマに到達しました。一見当たり前のよう

このテーマを果たしてどれだけの方が受け入れてくださるか、式典当日はドキドキして客席の後ろから見ておりました。割れんばかりの熱い拍手がその応えでした。足かけ3ヶ月の長きにわたり、無償で稽古場を提供して下さったわたしの家の菩提寺雲光院に、創立者のうちのおひとり、合川正道氏が眠っておられることもわかり、不思議なご縁を感じます。演劇界での長年の友人たちの献身的な協力、取材にご協力いただいた大学内外の皆さま、そして、上演に向けて全面的にサポートをして下さった総合政策学部事務局と学生たち、すべての関係者に心から御礼申し上げます！



高額寄付感謝状 贈呈式

記念式典当日11時30分より、多摩キャンパス8号館で「高額寄付感謝状贈呈式」を行いました。平成16年5月から長らく中断していた贈呈式も今回で5回目を数え、対象者499名のうち、特別賛助員3名、

賛助員170名の出席を得て、和やかな雰囲気の中にも粛々に行われました。

本学役員列席のもと、久野修慈理事長の感謝の言葉に続き、代表として特別賛助員1名、賛助員2名が登壇し、感謝状、称号記の授与ならびに記念品の贈呈が行われました。

記念品については、「環境」と「世界」をキーワードとして推進する中央大学の大学改革の方向性を表したのものとして地球儀が贈呈され、出席された方々の関心も高く、好評を博しました。

創立125周年募金も開始から9年を経過し、特別賛助員、賛助員も第1回贈呈式から数えて、1,424名となりました。寄付者各位のご厚情に改めて深謝いたします。

なお、当日欠席された方にも感謝状、称号記、記念品を後日お届けしました。



本学出身のトップアスリートによる 応援ビデオレターを上映

厳しいスポーツ界の第一線で活躍する本学出身の5名の方から映像メッセージをいただき、記念式典当日、8号館の映像配信会場ほか、附属の中学校・高等学校において同時に上映されました。



亀井 義行氏
読売巨人軍：野球

商学部4年時、硬式野球部主将として東都大学野球秋季リーグで25年ぶりの優勝に貢献。2005年に読売ジャイアンツへ入団。

© 読売巨人軍



阿部 慎之助氏
読売巨人軍：野球

商学部4年時にシドニーオリンピック野球日本代表で出場、2001年から読売ジャイアンツで活躍。

© 読売巨人軍



中村 憲剛氏
川崎フロンターレ：サッカー

文学部卒業後、Jリーグ川崎フロンターレに所属、2010年FIFAワールドカップ南アフリカ大会に日本代表で出場。

© 川崎フロンターレ



五十嵐 圭氏
三菱電機ダイヤモンドドルフィンズ：バスケットボール

文学部卒業後は日本バスケットボールリーグに所属、日本代表にも選出されるなど活躍。

© JBL



福澤 達哉氏
パナソニックパンサーズ：バレーボール

法学部4年時に北京オリンピック出場、卒業後はVプレミアリーグのパナソニックパンサーズに所属。

© パナソニックパンサーズ

校友会体育連盟 応援部による演技

記念式典終了後、9号館の外では、校友会体育連盟応援部による演技が行われました。校歌や応援歌と一緒に口ずさむ人も多く、応援部のリーダーのもと、母校へのエールで心をひとつにしました。



2010年11月現在(順不同)